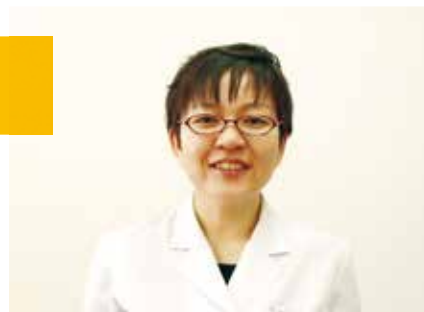


在宅薬剤師『やまね』の訪問日記

第13回

株式会社ファーマシイ 山根 暁子



薬剤師を名乗るなら言っではいけない言葉がある。

「100%効きます」。患者さんから薬の効力比や効果を尋ねられた際に、いつも意識していた。「前の薬より強いのか？ 弱いのか？」、「これを飲んだら絶対、血圧が下がるのか？」、「2個飲んだら2倍眠れるよね」——。患者さんの質問に、言葉尻を誤解されないよう、医師の処方意図を自分が歪めてしまわないよう細心の注意を払って対応した。ちょっと前までとても大事にしていた仕事のポイントだったが、今は少し違った考えも持っている。

*

がん終末期の若いお母さんとのやり取りで、私は自分で行っていた戒めを破った。出会ったとき彼女はベッド上において、頬はこけ、肌にも闘病の陰りがあるが、紡がれる言葉は聡明で、眼差しの美しい方だった。

積極的ながん治療の継続を中断し、自宅での療養を望まれた。いちばんの主訴は不眠。「自分がいなくなったあとを考えると不安になり、どうしても薬が必要」。要望はそれだけだったが、お子さんや親御さんのことなど彼女がいなくなったら表面化する問題は多くあり、不安を抱くのも無理はないといった第一印象だった。

その後、短い期間で症状は進行し、薬で抑え切れない苦しさ、痛みに悩まれるようになった。医療チームの皆で集まり、カンファレンスを開いた結果、「鎮静（セディーション）」を選択するにいたった。残された時間を、意識は薄れてしまうが痛みを感じないように眠ってすごしてもらおうケアだ。若くして発病され、数年間にわたって辛い抗がん剤治療を、不安を抱えながらがんばった。それでも、がんは広がり、死を実感する日々の中、痛みから、不安から解放されたいという彼女の望みを叶えて

あげたかった。

ところが、薬が効かない。主治医の先生曰く、「象が眠るほどの量」を投与しても彼女は眠れなかった。薬剤師として、抗不安薬の長期多量連用による受容体の感受性の低下を疑い、別の受容体作動性の薬剤の服用を主治医の先生に提案し、使うタイミングを計っているときだった。呼吸苦と痛みを耐えながら、聡明な彼女が深刻な雰囲気にならないよう、わざと歌うように甘えるように主治医の先生に向かって、「先生ー、うそつきー、眠らせてくれるって言ったのに」と口にした。その言葉に私でさえ刺されたような気持ちになり、とても主治医の先生の顔を見られなかった。

新しい“武器”をすぐ用意することになり、投与の準備を枕元で始めた。彼女がまた、場を和ませるためにゆったりとした声で、「（今度の薬は）効く？ 絶対眠れる？」と尋ねてきた。私は、「効きます」と即答してしまった。主治医の先生が少し驚いたような顔をした。言ってから私もびっくりした。

*

果たして、薬は効いた。効いたからか、この件に関してその後、先生と話す機会はなかった。ただ自分にとっては、ひとつの大きなターニングポイントになった。言質だとか専門家の責任だとかを超え、どうしても言わなければならない言葉もときにはあり、ケアにおいて人間を相手にするのであれば人間にしかわからない心の機微への対応が要求される。服薬説明のスキルは情熱を失わなければ経験によって洗練でき、薬剤成分に“見えない効能”として付加できる。薬を本当の意味で、生かすも殺すも薬剤師次第だと思い知らされた出来事だった。